

平成 25 年度教職大学院派遣研修研究報告書

派遣者番号	25K02	氏 名	牧田 淳一
研究主題 —副主題—	文学的な文章の教材における読みの解釈を検証する授業の一考察 —アブダクションの有効性を通して—		
所属校	練馬区立大泉第二小学校	派遣先	創価大学教職大学院

項 目	内 容
I 研究の目的	1980 年代の読者論の導入により、それまでの「教師主導の正解至上主義」が批判された。しかし、学校では今もなお「正解至上主義」的な授業が見受けられる。あからさまではないものの、子供の反応から意図的に「正解」へと誘導させている。大半の子供たちは、自分なりの作品解釈の形成の機会を奪われ、自由に考える意欲を失っている。また国語科の授業は他教科と比べて、達成感・上達感に欠けるきらいがあった。特に読みの解釈を求める場面では、子供の意見はほとんど認められ、オープンエンドになりやすい。解釈の蓋然性は検討されていないのが現状である。本研究では読みの解釈における検討の在り方を探り、よりよい解釈を求めようとする子供の育成を目指していきたい。 国語の授業の課題としては次の 2 点にまとめることができる。 (1) 教師の誘導による「正解至上主義」的な授業により、子供たちに考える自発性・能動性のある問いが生まれていない。 (2) テキストの表層を確認する程度にとどまり、テキストを的確に解釈する力を付けさせていない。 これらの課題に対して、本論文では「子供の問いを誘発する発問の工夫」、「テキストを的確に解釈する力を養う授業」の構築について考察していった。
II 研究の方法	① 国語の研究校への授業参観および協議会への参加 主に調布市立富士見台小学校の授業参観・協議会への参加 思考力・判断力・表現力を共に伸ばす授業の工夫を「判断でしかける授業づくり」に焦点化した研究をしている。「判断でしかける」が本研究での「子供の問いを誘発する発問」に近いことから、授業参観、協議会に参加する。 ② 文学教材の読みの解釈における先行研究の検討 主な文献 鶴田清司「読解力を高める国語授業の改革」 鎌田首治朗「真の読解力を育てる授業」 等 ③ 「子供の問いを誘発する発問」を視点においた授業提案 「黄色いバケツ」(光村図書・2 年) 「すがたをかえる大豆」(光村図書・3 年) 「夏のわすれもの」(東京書籍・4 年) 「大造じいさんさんとガン」(光村図書・5 年) 「未来に生かす自然のエネルギー」(東京書籍・6 年) ④ 文献による「発問」と「解釈」の検討 田近洵一の発問の重要性について 『国語教育の方法 ことばの「学び」の成立』 井上尚美による発問の分類について 『国語教師の力量を高める一発問・評価・文章分析の基礎』 西林克彦の解釈における文脈とスキーマの重要性について 『わかったつもり 読解力がつかない本当の理由』 ⑤ 藤森、佐藤の読むことにおける解釈の授業の検討および分析 藤森裕治「バタフライマップ法」 佐藤佐敏「解釈のアブダクションモデル」

Ⅲ 研究の結果	本研究を通して以下のことが明らかになった。 1 発問の性質と重要性 安易な発問への依存は、子供の思考を枠付けすることになる。発問はそれ以外のことを考えることを子供から奪うという性質がある。 しかし、教師による発問なしに子供に直接、学習に値するような価値ある課題を設定させることは極めて難しい。 読みの授業でいえば、まず教材（作品）との出会いを切実なものとすることによって、子供に内面の葛藤、つまり矛盾の感覚を引き起こし、それを意識化させていかなければならない。そのために最も有効なのが、発問である。発問とはそれが契機となって子供に問いを生じさせるものであるべきである。 2 子供の問いを誘発する発問 子供の問いを生じさせる発問には「思考を促すもの」、「思考を深めるもの」、「思考を揺さぶるもの」があると考ええる。具体的には以下の三点が子供の問いを誘発する発問として考えられる。 <table border="1" data-bbox="491 672 1433 828"> <tr> <th>子供の問いを誘発する発問の種類</th><th>思考への働き</th></tr> <tr> <td>①選択肢から判断を求める発問</td><td>思考を深める</td></tr> <tr> <td>②多様な答えが考えられる発問</td><td>思考を促す</td></tr> <tr> <td>③既有知識や経験とのズレを意識させる発問</td><td>思考を揺さぶる</td></tr> </table> 3 解釈における文脈とスキーマの重要性 西林克彦の文献から、読み手の文脈の捉え方と既にもっているスキーマによって人それぞれに解釈が異なることが分かった。子供一人一人が多様な解釈をする原因を、文脈の捉え方とスキーマの違いに置いて子供の反応を見ていく必要がある。 4 解釈の妥当性を検討する 解釈の妥当性を検討する授業はあまり見受けられない。根拠と理由の違いが教師に意識されていない場合も多い。藤森は、根拠とは解釈が導かれる基となる本文の言葉や構成などの諸情報、理由とは根拠として挙げた本文のことばや構成がどうしてその解釈につながるかについての推論として明確に分けている。解釈は根拠と理由の両方に触れる必要がある。 5 読みの解釈におけるアブダクションモデル 佐藤はアブダクションモデルの推論過程を鍛えることで、読みの力の向上が図れるとし、子供に解釈の交流を求めているのは、この推論過程の差異を確認することだとしている。この推論過程を鍛えるためには選択式の発問が有効である。選択式の発問は、＜解釈＞部分を先に指示することで、本文の＜根拠＞とその＜理由＞の検討を導くという、問いの仕組みになる。＜解釈＞の蓋然性は＜根拠＞と＜理由＞の整合性や論理性で決定する。	子供の問いを誘発する発問の種類	思考への働き	①選択肢から判断を求める発問	思考を深める	②多様な答えが考えられる発問	思考を促す	③既有知識や経験とのズレを意識させる発問	思考を揺さぶる
子供の問いを誘発する発問の種類	思考への働き								
①選択肢から判断を求める発問	思考を深める								
②多様な答えが考えられる発問	思考を促す								
③既有知識や経験とのズレを意識させる発問	思考を揺さぶる								
Ⅳ 考察	子供がある問題を解決する場面において、問題解決型学習に代表されるような「問題把握→自力解決→検討→まとめ」という過程が一般的である。問題解決型の過程では、結論に至るまで根拠や理由を考え、そこから結論を導き出すというもので、「解決できた」という喜びを感じやすい。子供の思考過程に合った考え方といえる。しかし佐藤の実践では、先に結論となるものを選択するので、子供にとってはある程度の結論が絞られている状態から始まることになる。佐藤の実践の課題点を改善する方法として「選択型以外のアブダクション」、「スケーリング・クエッションによる発問」を提案した。 本研究では佐藤のアブダクションモデルに「子供の問いを誘発する発問」という視点を加え、子供の思考過程にそった新たな発問の型を取り入れた。特に「スケーリング・クエッション」型の発問は、子供の問いを誘発させるだけでなく、二項対立の選択型にはない「解釈の微妙な差異」を視覚的に意識できるものとして「テキストを的確に解釈する」方法としても有効であると思われる。本研究は検証授業を行っていない。今後、解釈と根拠と理由の整合性を検証する授業を行い本研究の実践的裏付けをしていきたいと考えている。								